

ICT を活用して児童の関心題材を集める辞書作り活動

谷内正裕(ベネッセ教育研究開発センター) yachi@mail.benesse.co.jp

1. 背景と目的

コミュニケーション活動を中心とした英語活動では、対話を行う双方の間での情報のギャップと、それに答えるのに十分な語彙の両方を同時に満たす必要がある。低年齢の学習者の場合、彼らの身近な題材が教師との間の情報のギャップの要素となりやすい。これまでも児童の関心の面でも効果的であることは指摘され、様々な教材が提案されている。しかし目の前の児童が関心を持つ題材を事前に集め、教材として用意するのは困難である。本稿では ICT を活用してこの課題を解決する方法を提案する。

2. 本稿で提案する ICT 教材とその使い方

本稿では、ICTを用いた教師と児童の協調的な取り組みによって児童の身近な題材の単語リストを作り、教材として活用する試みを提案する。まず児童が、1人または数人でカメラ付きの携帯電話を教室内で持ち歩き、教室内外に見られる対象を写真で撮影する。撮影した写真は特定のメールアドレス宛に送信する。児童から送られた写真は教師のコンピュータで受信される。教師は児童から送られた写真を見て対応する英単語を入力すると、電子黒板やタブレット PC 上にカードとして表示させる。電子黒板やタブレット PC では手で直接カードを操作できる。児童がカードに触れると、画面上のキャラクターが登録された英単語をもとに合成音声で発音し、写真と発音が結び付けられる。

3. 本稿で提案した手法による教材の特徴

本教材は、カメラを用いることで児童の身近な題材を彼らの視点から直接収集できる点、この題材を集める活動自体がコミュニケーション中心の授業の一部となる点が特徴である。児童によって集められた題材をもとに、カード型の教材として画面上に提示されるため、教師と児童のコミュニケーション活動をサポートする電子辞書を用意に作り上げることができ、蓄積することができる。

また動画で撮影することで「動詞の辞書カード」も作成でき、現在進行形の感覚を身につける教材を作ることもできる。さらにカード型である利点を生かし、カードを並び替えながら文を作ったり、他のカードと重ね合わせて関連した語を発音させたりと、作り上げた教材で発展的な学習に展開できる。

4. 辞書作り活動を授業として扱った例

【第1回】自己紹介、友達紹介してみよう:カメラでお互いの写真を撮る。カメラで写真を撮って回る。

My name is ～. His/Her name is ～. Our group name is ～. / We are ～.

【第2回】見つけたものは何?:電子黒板で写真を貼り付ける。授業後電子黒板の画面を印刷。

What did you find? I found this. It's called ～. Where did you find ～?

【第3回】何しているの?:携帯電話で友達の動きを撮る。電子黒板で SVO を写真で並べて作文。

What are you doing? (I am) ～ing. He/She [動詞 ing] (目的語).

【第4回】マンガで書いてみよう:4コマの話を2つ描く。完成したら電子黒板で発音を確認。

①モノが置かれている ②誰かがモノに近づく ③動作に対する質問 ④モノに対する動作

There is a [もの]. [名前] is coming. Is he/she [動詞 ing] (目的語)?

【第5回】絵の通りやってみよう:マンガの動作を、劇で演じる。お互いの動きを、英語で解説する。

Our group name is ～. Title is ～. Please enjoy our play. Thank you.